

地域特性に応じた特別な教育的ニーズに関する情報システムの構築

○安井友康,青山眞二,齊藤真善,千賀愛,三浦哲,池田千紗(北海道教育大学札幌校),小野寺基史(北海道教育大学教職大学院),安達潤,大久保賢一,萩原拓,蔦森英史(北海道教育大学旭川校),小淵隆司,戸田竜也,二宮信一(北海道教育大学釧路校),五十嵐靖夫,北村博幸,細谷一博(北海道教育大学函館校),小北麻記子,大山祐太(北海道教育大学岩見沢校),金澤恵美,松田岳大,田外真也(北海道教育大学附属札幌小・中学校特別支援学級),平田新次郎,厚谷摩紀,白府士孝,永長明之(北海道教育大学附属特別支援学校)

はじめに

特別な教育的ニーズのある子どもやその保護者に対して、地域の特性に応じた教育的資源を提供できる体制作りが求められている。とりわけへき地・小規模学校が多数ある北海道では、広大な地域における教育ニーズに応じた専門機関の支援・サポート体制を構築する必要がある。システム構築の背景には、情報共有の難しさから学校が地域の教育・福祉資源と実際の連携を取れないという問題がある。特に障害の重度化や発達障害などに対応した支援ノウハウの蓄積や情報提供が求められている。そこで北海道教育大学特別支援教育プロジェクトとして、特別支援に関する情報提供のシステムを構築させるとともに、孤立した状況に置かれ、学力格差も生じがちな遠隔地の小・中・高等学校と特別支援学校を包括する大学を拠点とした地域支援システムを構築するための実践を行う。

ほくとくネットを活用した情報配信



プロジェクトの推進にあたっては、「発達支援ツール作成部門」、「人材育成部門」、釧路に拠点を置く「地域(僻地・小規模)サポート部門」を構成し、附属校とともに教員の横断的組織により調査研究・実践をおこなっている。

収集されたデータや情報は、専用のサーバ「ほくとくネット」に掲載され、随時、情報配信が行われている。

「ほくとくネット」には、特別支援教育に関する情報や教材、講演会やイベントの情報などについて掲載され、情報発信の拠点の形成を図るべくサイトの構築が進められている。

なお平成23年7月の開設から平成26年10月には約52,000アクセスを数え、北海道ばかりではなく、全国の特別支援関係者から閲覧されている。



大学機能を生かした教育支援の実践

ツール開発

『発達支援方法及び検討』について、これまでの「携帯型端末(I Pad mini)」を使用した実践では、教材の提示等、視覚的なツール(狭義の意味で)として用いてきたが、携帯型端末を活用した支援方法の検討について実践を通して検証した。実際の臨床場面で、子どもの教育的ニーズに合わせた活用や、よりわかりやすい視覚的なツールとして効果的に活用できた。

臨床授業の充実に向けた取り組みとしてネットワークカメラを用いて、指導とは別の部屋で複数の学生が始動の様子を観察できるような環境構築を行った。携帯型端末と連動することで、別の部屋でも指導を観察することが可能になった(函館校)。

ほくとくネット：www.hokutoku.net

地域支援と情報提供

研修会の開催(上川版個別の支援計画「すくらむ」)

幼児期から就学期の子どもたちへの支援のあり方をテーマとした「子ども発達支援合同研修会」を旭川市子ども発達支援連絡会議、北海道教育大学特別支援教育プロジェクトなど5団体の共催により開催した。平成25年度は340名が参加し、講演や事例発表、意見交換をして情報を共有した。講演では、障害のある子どもも地域の学校で共に学ぶ「インクルーシブ教育」のための取り組みを文部科学省が進めていることについて報告され、その後分科会に分かれ、保育園や学校等現場の報告を元に討議された。研修後のアンケートには「児童ディなど民間事業の取り組み内容について初めて知ることができた」「子どもの情報の引き継ぎの大切さを学んだ」などの声が聞かれた。(旭川地域)



新聞報道より

アダプテッド体育・スポーツ国際ワークショップin北海道企画協力

平成25年8月23～26日、北海道の千歳川、札幌、夕張などを会場に、スポーツ活動の実践体験とパネルディスカッションなどを組み合わせて実施された。内外から、計40名あまりが参加し、地域の特性を生かしたアダプテッドスポーツの実施や支援方法について、カヌーなどの体験を通して検討した。パネルディスカッションでは、次世代のアスリート育成における課題や、地域におけるスポーツ参加に対する展望などについて討論が行われた。(札幌・岩見沢地区)



インクルーシブ子育て支援「キンダーぶらっつ」

札幌校臨床スペース小ホール・遊戯室にて実施、平成25年度は毎月1回、計10回、地域の親子、延べ約200名が参加して、札幌校に設置された特別支援教育臨床スペース(小ホール・遊戯室)を活用した休日の遊びの支援を実施した。



ドンマイの会(当事者の会)「体操教室」

札幌キャンパス、小ホール(体育館)で8回実施、スタッフ、学生の参加により実際の地域の教育・支援ニーズに対する支援を行うとともに支援における実践力の向上や大学機能の活用に関する基礎的な情報の収集を行うことができた。(札幌地区)

へき地・小規模地域の研究実践

道東地域の発達支援ニーズの分析が実施された。本州1市と北海道道東4町の特別支援学級に在籍している児童生徒の保護者を対象に、乳幼児期の支援ニーズに関して、回顧的アンケート調査に取り組んだ。回収された100人の回答について、記述統計処理による分析を行い、「支援ニーズ」について地域間で比較検討を行った。その結果、道東の4町は共通して、専門機関受診・相談の地理的、時間的、人的負担が大きいことが共通していた。さらにこれらの地域では過疎、へき地小規模校の学校が多く、放課後、長期休暇の子どもの過ごし方、親が子どもの相手をすることへの悩みも共通していた。また、障害への親の気づきの時期は、健診体制・内容による違いに加え、親の障害に対する知識やイメージなどが関連していることが伺えた。親の気づき、診断、支援開始時期には、地域支援のあり方がその要因として指摘された。(釧路校)

まとめ

北海道という多様な地域特性を有する地域に対し、情報サーバ「ほくとくネット」による情報配信を継続しておこなっている。今後に向けて、さらなる情報内容についての充実、ニーズに合わせた内容の構築、新しい情報の継続的掲載などが検討すべき課題として挙げられる。

報告等

北海道教育大学特別支援教育プロジェクト(2014) 地域特性に応じた特別な教育的ニーズに関する情報システムの構築—遠隔地域を包括した子どもの発達支援を目指して—